

# 教職課程におけるケースメソッド活用の方向性

—「ケースメソッド教授法」における学びの複層性に注目して—

安喰勇平（広島大学大学院・院生）

## 1. はじめに—本稿の目的と視察概要—

### 本稿の目的

ケースメソッドは、現職者教育、実務者教育の機会と必要性の増大に呼応するように、多様な教育領域において採用され始めており、その領域の一つに教職課程がある。例えば、佐藤学は、教師教育において、理論と実践を架橋しつつ教える方法としてケースメソッドに注目している（佐藤 1997）。また丸山恭司は、ケースメソッドのうちに教職倫理教育の方法としての有効性を見いだしている（丸山ら 2006；丸山 2008）。他にも、スクールリーダー養成や養護教諭養成課程での展開可能性が指摘されている（斉藤 2011；日本教育学会実践推進委員会 2014）。これらの例からは、ケースメソッドという教授法に多様な期待がかけられていることが分かる。ケースメソッドがこれら多様な期待に応えるだけの潜在力を秘めているものであると仮定した上で、本稿では、教職課程のなかでケースメソッドを活用する際の一つの方向性を提示する。そのことは、教職課程の科目のなかで、ケースメソッドで教えるのに最も適切な科目を示すことを意味しない。そうではなく、「ケースメソッドで教える」ということの強みを、ケースメソッドという教授法を用いた一事例の検討を通して、浮かび上がらせようとする試みである。この試みを通じて、教職課程でのケースメソッド活用の方向性を提示することが本稿の目的である。そこで本稿では、筆者による慶応義塾大学ビジネススクールへの視察内容を手がかりにしながら、目的の達成を目指す。

### 視察概要

筆者は、2014年8月28日（木）、慶応義塾大学ビジネススクールにおいて開講されている講義「ケースメソッド教授法」（授業者：竹内伸一）を視察した。

### 考察の観点

本稿は、視察にて得られた「ケースメソッド教授法」のシラバスを中心的に扱いながら、その授業の構造を明らかにする。視察で得られた感想等に基づいて、考察を行うことも可能だが、そのようなアプローチでは視察した一回分の授業の考察にとどまらざるを得ない。教職課程のなかでケースメソッドを活用する方向性を提示することを目指す本稿の性格を踏まえれば、視察した4回分相当の講義にのみ注目するよりも、15コマ分相当の講義全体において、ケースメソッドで/がどのように教えられているか、と問うことに重点を置く方が有益だろう。15コマ分相当の講義全体の構造をシラバスから描き出すことによって、講義全体においてケースメソッドという教授法がどのように体得されうるものであり、かつケースメソッドという教授法がその体得をどのように促すものであるか、と授業者によって考えられているかを示すことができよう。

「ケースメソッド教授法」は、ケースメソッドという教授法で教えることができるようになるための授業であり、言い換えるならば、ケースメソッドで教えることを教える授業である。そして教職課程もまた、教師を目指す学生たちの教える力を様々な仕方で養成する課程である限りにおいて、教えることを教えるという特徴を有している。教えることを教えるというこの観点に立てば、当授業の構造を明らかにすることは、広く教えることを教える教職課程において、特にケースメソッドで教えることを教えることの意義がどのように位置づくのかを考えるのに役立つだろう。

### 考察の手順

本稿は、まず講義「ケースメソッド教授法」の受講生や授業計画などを整理する。その整理に基づいて、次に「ケースメソッド教授法」の構造を明らかにする。議論を先取りすると、そこではケースメソッドにまつわる学びが複層的に構造化されていることが確認される。最後に、その構造を踏まえた上で、教職課程におけるケースメソッド活用の方向性を示す。

## 2. 講義「ケースメソッド教授法」

### 「ケースメソッド教授法」の位置づけと受講者

当科目は例年、慶応大学ビジネススクールの大学院科目「ケースメソッド教授法」として開講されているが、2014年度は自主勉強会として開講されていた<sup>1</sup>。受講生は、大学院生（社会人学生とストレートの学生を含む）と、科目等履修生（大学教員）によって構成されていた。

### 「ケースメソッド教授法」の目的

当科目の目的は、「ケースメソッド教育を理解し、実践のための第一歩を踏み出せるようになる」ことに置かれている。言い換えるならば、学習者がケースメソッド教育の実践者としての力を育むことが目指されている。さらに以上の目的を追求することは、同時に、「日常の職務の中にある会議やミーティングでの討議の場面で適切にリーダーシップを発揮するセンスも磨かれる」ことにつながる、という。

### 「ケースメソッド教授法」の授業計画

以上の目的を達成するために、本科目の中心には、ディスカッションリード演習が置かれている。この演習では、受講者が実際にケースメソッドで授業を運営することになる。この演習を通して、「ケースメソッドによる授業運営に必要な実践知と身体能力」を獲得することが狙われている。

当科目は計4日間にわたって行われる（註：2014年度は、7月29日、8月9日、8月19日、8月28日の4日間にわたって行われた）。初回の授業は、オリエンテーションとレクチャーに多くの時間が割かれ、また、ディスカッションリード演習を講義者の竹内が行う。第二回から第四回までの授業は、基本的には表1のようなタイムスケジュールで行われる。

時間	内容
10:00~10:10	オリエンテーション
10:10~11:10	レクチャー&ディスカッション
11:10~13:30	ディスカッションリード演習①
13:30~14:30	昼食
14:30~16:50	ディスカッションリード演習②
16:50~17:00	Q&A、まとめ

表 1 第二回から第四回までのタイムスケジュール

授業内のレクチャーで扱う内容は、ケースメソッドを理解し実践するのに必要な知識である。また、そのうちディスカッションリード演習は、「グループ討議」(30分)、「クラス討議」(40分)、「フィードバック」(50分)の三段階に区分される(註:各段階間に10分間の休憩が入る)。第二回から第四回までの計6回にわたるディスカッションリード演習は、受講者が行う。その際、受講者がディスカッションリード演習で扱うケースは、全て「ケースメソッドが行われている教室に生じた問題状況を描写した」ものである。

### 3. 考察—学びの複層性に注目して—

以上のような計画に基づき実施される「ケースメソッド教授法」の特徴の一つに、学びの複層性を挙げることができる。その複層性は表2にまとめられよう。

	授業内の活動	学ぶ主体	学ぶ形式
①	レクチャー	受講者全員	ケースメソッドに関する知識のレクチャーを受ける
②	ディスカッション リード演習	ディスカッション リード演習者	ケースメソッドで授業を運営する
③		ディスカッション参加者	ケースメソッドで授業を受ける
④		受講者全員	ケースメソッドにまつわる ケースから学ぶ

表 2 学びの複層性

①は文字通り毎回の授業前半で行われるレクチャー授業での学びを指す。②は、ディスカッションリード演習にて、ケースメソッドで授業を運営する演習者による学びを指す。③は、ディスカッションリード演習にて、ケースメソッドで授業を受ける学習者による学びを指す。④は、ディスカッションリード演習で用いられたケースメソッドにまつわるケースからの学びを指す。

それぞれの学びが完全に独立しているわけではない。特に②③④の学びはディスカッションリード演習に関するものであるため、むしろそれら学びは緊密に絡

み合っている。また、②③④の学びと①もまた独立した関係にはない。①で学んだケースメソッドに関する知識をもとに授業を運営し(学び②)、その知識に基づいて授業者のディスカッションリードを評価し(学び③)、そこで用いられるケース内の問題に取り組む(学び④)。このように、「ケースメソッド教授法」においては、①～④の学びの層は独立することなく、絶えず交流し続ける構造を持つ。この構造が、「ケースメソッド教授法」の目的のために準備されているのである。学びの複層性を構造化したケースメソッドという授業方法。この授業方法を用いることによって実践力の育成が目論まれている。

「ケースメソッド教授法」に潜在している学びを、次のように関連付けることができるだろう。まず、レクチャーを受け(学び①)、理論を学習する。そして、ディスカッションリード演習にて、受講生の代表者が実践し(学び②)、同僚の受講生の授業を体験する(学び③)。そのディスカッションリード演習にて、検討対象になるのは「ケースメソッドが行われている教室に生じた問題状況を描写した」ケースである(学び④)。これらの学びを通して、「ケースメソッド教授法」は運営されている<sup>2</sup>。

#### 4. おわりに

「ケースメソッド教授法」においては、ケースメソッドで教えることができるようになるために、ケースメソッドに関する学びが複層的に構造化されていた。「ケースメソッドで教えることができるようになる」という目的を達成するための、各層が他層へと浸透していく構造が、授業全体の学びを深めていた、と推測できる。

では、以上のような構造を有する「ケースメソッド教授法」は、どのようなケースメソッド活用の方向性を教職課程へと示唆しているだろうか。本稿では、教職課程における特定の科目を教える教授法としてのケースメソッド活用の方向性を提示したい<sup>3</sup>。すると、教職課程のうち何を、ケースメソッドで教えることができるか、とさらに問い進める必要が出てくる。この問いへ明確に解答することは、本稿の射程を超えているが、「ケースメソッド教授法」の構造から示唆を得ることはできるだろう。「ケースメソッド教授法」が示唆しているのは、学びの複層性を利用した授業づくりである。ケースメソッドという教授法を体験し、運営し、さらにケースそのものも活用しながら、ケースメソッドに関する学びを深めるのが、「ケースメソッド教授法」である。したがって、「ケースメソッド教授法」の構造が教職課程に示唆しているのは、ケースからの学びと、ケースメソッドを体験することとの間の積極的な関連付けの必要性だと言える。

ケースメソッドを体験することは、ケースメソッドという教授法を通して学ぶ以上のものを学ぶことができるとされる。ケースメソッドは教えたい事柄 A を学習者に伝えるだけの方法ではなく、ケースメソッドを体験すること自体が、副産物 B をもたらすのである。このケースメソッドを体験することの効果について論じている竹内の論を参照して、本稿を締めくくる。竹内は、ケースメソッドの体験を通して得られる学習成果物を、直接的な恩恵(=主産物)と間接的な恩恵(=

副産物) という二種類に分ける。直接的な恩恵は、学習の成果そのものである。他方で、間接的な恩恵は、学習から派生して手に入ったすべてのものであり、討議の副産物と言えるものである(竹内 2010、46)。竹内は、この間接的な恩恵をもたらすのは、ケースメソッドの次の三つの特徴である、と整理する。①全員が協力して一つのものを探求するコラボレーションの場であること、②「勇気」、「礼節」、「寛容」の精神があり、「学びの共同体」が機能する「試行創造」の場であること、③自らの言動に配慮し、他者の意見を耳と心の両面で聴き、ともに議論する仲間を敬愛する姿勢が身に付く、人間成長の場であること、の三点である(ibid.、47-48)。竹内は、ケースメソッドの三点の特徴がもたらす間接的な恩恵が、直接的な恩恵に「勝るとも劣らないほど大きい」と見なし、また、間接的な恩恵の方を主目的にしてケースメソッドを行うこともあると言う。むしろ、「さまざまな環境変化の中にあって八〇年間生き続けてきた理由には、この教育方法が生み出す副産物の豊かさが大きく寄与している」と論じている(ibid.、49)。

ケースメソッドという教授法がもたらす間接的な恩恵と、教職課程で教えるべき内容を積極的に結びつけることの重要性が、「ケースメソッド教授法」における学びの複層性に注目することで、見出された。そして本稿で提示できたのは、何かを教えるための一つの方法として捉えるだけではなく、ケースそのものからの学びとケースメソッドを体験することとを緊密に絡み合ったものとして積極的に関連付けるという方向性である。このような方向性を踏まえた場合、教職課程では具体的にどのような科目を教えることができるのか。この問いの考察は今後の課題としたい。

## 註

- 1 ただし、本稿が参照するシラバスは科目、授業、単位などの科目授業に関する用語がそのままにされてあるため、その点については留保しておく。
- 2 「ケースメソッド教授法」の授業者である竹内伸一は、その著書のなかで、「ケースメソッド教授法」の構造を「劇中劇構造」と評している。それは、当授業が次のように、「ケースメソッド授業が進行する教室の状況」が三層構造になっていることに由縁している。①「ケース教材の中に描かれているケースメソッド授業が進行している教室の状況」、②「①のケースを使用し、教師役(演習者)のリードによるケースメソッド授業の演習が行われている教室の状況」、③「筆者が科目担当者(授業者)を務める「ケースメソッド教授法」のクラスが進行している状況」(竹内 2010、247-249)。
- 3 この他にも、教師に身につけて欲しい教授法の一つとしてケースメソッドを捉える方向性も考えられるが、高等教育における優れた教育実践を視察するという性格を有する今回の視察の狙いを踏まえ、本稿では考察の方向性を限定する。ただし、教師に身につけて欲しい教授法の一つとしてケースメソッドを捉えるならば、今回視察した「ケースメソッド教授法」のカリキュラムは、一つのモデルとして有効であろう。ただし、その際には、大学の教壇に立って教職課程版「ケースメソッド教授法」を運営できる人材がいるかどうかが問題になる。

## 参考引用文献

- ・ 斉藤ふくみ「養護教諭養成課程学生の養護実践場面に関する討論授業の効果—ケース・メソッド授業を通して—」『茨城大学教育学部紀要. 教育科学』(60)、2011、143-151.
- ・ 佐藤学「教師教育におけるケース・メソッドの起源—デューイの「知性的方法」—」『教師というアポリア—反省的实践へ—』世織書房、1997、107-133.
- ・ 自主勉強会「ケースメソッド教授法」シラバス
- ・ 竹内伸一『ケースメソッド教授法入門—理論・技法・演習・ココロ』慶應義塾大学出版会、2010.
- ・ 日本教育経営学会実践推進委員会編『次世代スクールリーダーのためのケースメソッド入門』花書院、2014.
- ・ 丸山恭司、坂越正樹、曾余田浩史「教職倫理教育の必要性和ケースメソッドの有効性」、平成 15～17 年度科学研究費補助金（基盤研究（A））研究成果報告書『教育倫理教育カリキュラムの開発に関する基礎的比較的研究』（代表：丸山恭司、課題番号：15530507）、2006、7-13.
- ・ 丸山恭司「教育哲学妖怪譚と教職倫理教育宣言」『教育哲学研究』(98)、2008、58-67.